



11月号

ひだまり

今月のエッセー

立冬

最近、心に残ったひとつの景色があります。仕事からの帰り道、たまたま近所の公園を通りかかった私は、いつもよりやけに落ち葉が多いことに気づきました。何となしに辺りを見渡してみると、公園の奥に一本の色づいた老木が佇んで、いるのを見つけました。普段であれば特別、気にも留めなかったでしょう。でも、その日はどういいうわけか、ひっそりと静かに佇むその老木から目を離すことができなかつたのです。

積もった落ち葉を踏みしめながら老木へ近づいていくと、存外に大きな幹と節くれだつた枝が、夕暮れの空を覆うように伸びているのがわかりました。見上げ

てみれば、樹上に行くに従って黄色から赤色へと変化する葉っぱが、夕日を浴びてさらに鮮やかに色付いています。茜色に染まる紅葉と合間から覗く夕焼け色の空が何とも言えないほど綺麗で、半開きになった口から自然と白いため息が漏れるのがわかりました。見惚れる、というのはこういうことを言うのだなあ。そんなことをしみじみと感じていると、突然、どう、と強い風が吹き荒びました。

思わず肩をすくめたその瞬間、目の前が黄金色に染まつたのです。飴色や狐色、橙色に朱色、様々な色の落ち葉が目の前をくるくると舞い、老木と夕日の美しさも相まって幻想的な風景を作り出していました。ものの数秒でその景色はおさまってしまったのですが、その衝撃は私の中に強く残るものになりました。

後日、都心に木枯らしが吹いたとのニュースを聞きました。あの日の景色は今秋最後のプレゼントだったのかも。そう思うと、余計にあの美しさを特別に感じるのでした。もうすぐ、冬です。

◆山内弾正



生物と無生物のあいだ

著 福岡伸一



先日ノーベル生理学・医学賞が発表され、日本人では本庶 佑氏が受賞したというニュースが飛び込んできました。免疫細胞によるガン治療の可能性を発見したということで、まだまだ私たちが知らない生命の力があるのかと感じました。

今回ご紹介する本は、そんな生命の秘密を探る研究者達のドラマや生命が持つ不可思議さを描いています。特に印象的なのが、筆者が生命というものを「一度折りたたんだら二度と解けない折り紙」と表現した所です。

実際の折り紙は折目をつけても元に戻せますが、生命の場合は元に戻すことができません。それは生命が時間を巻き戻すことができないからです。しかし、生命の凄さとはその時々折目に合わせながらバランスを保つことだと筆者は語ります。

過去の経験があつて今の自分が存在するように、時間という流れから逃れることは出来なくても、うよきよくせつ紆余曲折を経て一つの完成を目指す。そこに生命の素晴らしさがあるのだと感じさせる一冊です。

◆秦 慧洲

編集後記

最近のスマートフォンやパソコンの機能にはスクリーンタイムというものがあります。これは、一日どれくらいスマートフォンやパソコンを使っているのかわかるものですが、なんでも私は一日平均三時間も使っているそうです！正直私は、この数字には大変驚きました。

現代人の多く（若者も大人も）は一日中液晶画面にとらめっこをしているような気がします。もちろん便利になった部分も多くありますが、必要以上の情報は私たちに様々な悩みももたらします。

たまには、スマートフォンやパソコンから離れて紅葉でもものんびり見に行きたいな、と『ひだまり』の記事を編集しながら思うのでした。

◆深澤亮道

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗事務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



三年度
本田真大ほんだしんだい

合わせた手に 満ちるもの

道元禅師さまの残されたことばに「放てば手に満てり」という言葉があります。執着を手放した掌は、大切なもので満たされるとい意味です。ではこの大切なものとは一体何を指すのでしょうか。先日は、人々の手を合わせる姿にその意味を教えてくださいました。

昔から私は神社仏閣等で手を合わせている人を見ると、どこか清々しい気持ちになることがありました。TVC Mで「おててのしわとしわを合わせてしあわせ」という言葉がありました。合掌には何か不思議な力があるのかなあと子供心に思うことがありました。

しかし、人の姿を見てそう思うことは

あっても、自分で手を合わせて清々しい気持ちになることはあまりありませんでした。特に大学を卒業し修行道場に入る

と気の抜けた合掌はしていただけません。曹洞宗は威儀立ち振る舞いの一つ一つを大切にするので、合掌の形は当然ながら先輩和尚さんの厳しい指導があります。

「合掌が低い！汚い合掌をするな！」

このような注意を何度されたか分かりませんが、要領の悪い私でも自分の姿勢は普段の心がけて変えられます。二年間の修行生活で身についた所作は私の中で大切な財産であると思っていました。

去る九月、先輩和尚さんのお誘いで、私は神奈川県のお寺で開かれるお祭りに参加しました。地域の曹洞宗僧侶が運営しているお祭りとはどんなものか興味があったからです。

用事を済ませ夕方会場に着くと、お祭りの目玉である万灯供養法会が僧侶たちによって執り行われるところでした。壇上にたくさんのろうそくを供え大勢の僧侶が平和を祈り読経をするのですが、これらろうそくの種火には原爆の炎が使われました。毎年の平和祈願に加えて、今

年は数多くの災害で亡くなられた方々への追悼法要でもありました。

法要が始まり、ステージの様子を見上げながら少し変な感じがしました。お坊さんの法要を観客席で一般の方と並んで見ることがこれまで無かったからです。ふと左に目をやると隣にいた若い男性が手を合わせています。はっとして周りを見渡すと、若い女性からおじいちゃんまで大勢の方が手を合わせているではありませんか。姿勢や形など気にしない、ただ目を閉じ一心に手を合わせる姿を見て私ははっとしました。何の為に、誰の為に私は手を合わせていたのだろうか。

平和を願い、苦しくつらい思いをした誰かを想って一心に手を合わせる周りの人々。一方で私は、綺麗な作法を心がけるあまりいつしか作法ではなく僧侶としての自分の見てくればかりを気にして手を合わせていることに気づいたので。

自分のちっぽけな自意識を手放し、ただ誰かの為に手を合わせたその時、私は今まで感じた事のない安らかな気持ちになりました。合わせた手の中が満たされた瞬間なのでした。

久松彰彦 の小唄

私は世田谷学園という、田園都市線の三軒茶屋駅と池尻大橋駅の間にある中高一貫の学校に通っていました。そこは曹洞宗の学校で、坐禅の授業があったり、授業時間が七〇分だったりという特色のある学校でした。高校生になると音楽の授業も独特なものになりました。それはバンドを組んで発表する、というものだったのです。

発表する曲や、自分がやるパート、楽器を選ぶのも自由で、ボーカル、ドラム、ギターなど、みんながそれぞれ興味のあるものを選びます。もともと得意な楽器を選ぶ人、歌が上手いからボーカルで引っ張りだこになる人などがいる中、私はベースギターを選びました。「簡単そう」「他の人と被らなさそう」という消極的な理由で選んだのですが、やってみるとなかなか面白いもので、ベースの低音は聞いているだけでも心地よく、指で弦を弾く感覚に夢中になりました。自分用のベースも買い、勉強もそっこのけで練習していました。

音楽の授業だけでひっそりとやり続けるつもりだったのですが、部活の先輩から強引に誘われて学園祭でも演奏することになってしまいました。目立たないでいることをモットーのようにしていた私にとって、学園祭の舞台上という「晴れ舞台」は罰ゲームのようにも感じましたが、今となっては良い思い出です。それがきっかけで今でも付き合っている友人ができたこともあり、バンドを組むという音楽の授業があつて良かったと、感謝しています。大学に入ってもベースを続けていたのですが、一年ぐらいうると他の活動も忙しくなって離れてしまいました。けれど最近またお誘いを受けて少し触る機会が増えました。前のように練習に熱中できるような気力も時間もあまりないのですが、ベースを弾いている時はその音色とともに、懐かしい思い出にも浸れる、大切な時間になっています。

